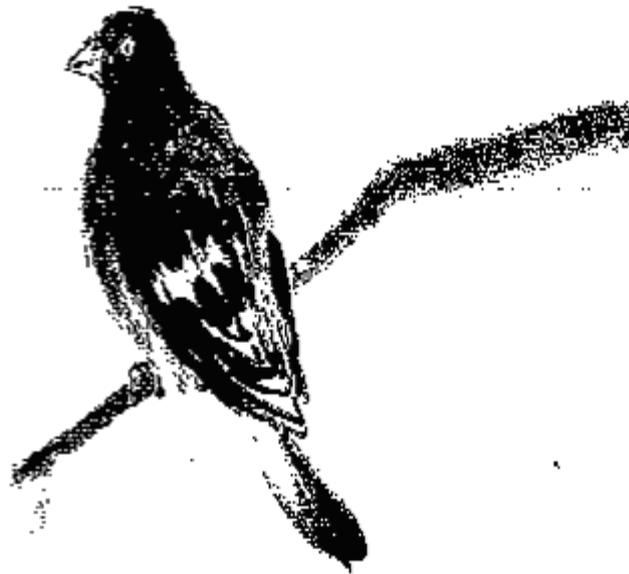


第1部
平和祈念文集
【一般の部】



【一般の部】

平和を働きかけよう、一人一人が政府へ、

五十嵐 岩浄（新木野在住）一九三一年生

私が生まれたのは昭和六年一月二日である。九月には満州事変が勃発し、日中戦争——太平洋戦争へとつながって行った。五才の頃に陸軍の大演習が実施され一般家庭に軍人が宿泊した。私の家にも士官と兵卒と一頭の軍馬が泊まったが、その時の異様な光景に驚かされた。風呂へ入るときの兵卒の「背中を流させていただきます」、寝る時「〇〇は休ませていただきます」といった言葉づかいや態度である。いま思うと、上官と兵の間の絶対服従の精神が軍隊には必要だったのである。二年のち小学校に入学。年一回学校講堂での青年団演芸会は人気を集めていて、目玉になるのは「戦時もの」であった。兵隊の勇ましい銃撃戦、クライマックスはいつも天皇陛下万歳を叫んで戦死するシーンであった。十三年には国家総動員法が公布され、十五年には紀元二千六百年記念祝典が全国の小中学校で行われ、十六年太平洋戦争へと突入して行った。農業だけのわたしの村でも赤紙（召集令状）が来て、出征兵を送り出す神社での壮行式がふえ始めた。武運長久を祈って身内を送り出す「バンザイ」の叫びが今も耳に残っている。

十七年小学六年を終えた私は、翌年県立福井中学へ入学した。だがこの頃すでに戦況は悪化の一途をたどり、十八年学徒動員が決まり工場・農村への勤労動員が実施される。中学生だった私も動員を命じられた。福井県芦原町の飛行場造成工

事である。夏の暑い日差しの中、敵の艦載機^{かんさいいき}注10による機銃掃射^{きじゆうそうしや}注11を警戒しながらの労働であった。空襲警報のサイレンが鳴ると近くの山の洞窟へ逃げ込んだ。戦況は好転せず、二十年に入ると爆撃機による本格的攻撃がふえた。八月一日夕方、福井市はB 29^{注13}百二十機による空爆を受け、家屋二万戸焼失、負傷者九万人以上うち死者千五百人以上という惨事となった。(同級生一人が犠牲)

私の家は市の中心から離れていたので被害は免れた。空襲は焼夷弾^{しょういだん}注12によるものだったが、初めての空襲に人々は近くの山へ逃げ込んだ。こどもの私と兄とはB 29を見てやろうという気持ちだったのか無謀にも屋根の上で見てみた。その巨大な姿には驚いた。双発^{注14}で一万メートル上空を飛ぶ巨大さ。日本の高射砲^{こうしゃほう}注15も抵抗したが、高すぎて弾丸が届かず手前で大きく裂^きしたと後で聞かされた。残念であった。その夜、暮れてから、家の前のバス道路に市街地から逃げ出した人たちの靴音^{くつおと}がつづいた。靴音だけでみんな無口だった。田舎では親せき縁者の安否に走り廻った。わが家でも叔父一人が見つからないので、私が自転車で市内へ探しに入った。くすぶり続けるあちこちに遺体が散らばっていた。福井駅の北の大きな踏み切りから街へ入ると。五人の焼死体にぶつかかった。逃げ遅れたのか、それとも直撃を浴びたのか。全員の着衣が燃えていた。こどもの遺体を前に、母親がぶつぶつと声を発している姿もあった。防空壕の入口に壕をかばうように手足を拡げた状態で亡くなつてゐる消防士の姿も痛々しかった。焼ける建物に足をはさまれ、切断してくれとわめく人、コールタールのドラム缶がはじけ、全身にタールを浴びた呼吸不全の女の人などのことも耳にした。無残であった。

幸いに叔父は無事であった。わたしの家は農業を営む祖母と呉服商の父母と別々の暮らし。祖母の家に叔父叔母と家族たち四組、呉服商の私の家には商売関係の三組がはいり協同生活が始まった。祖父母が農家だったので食べ物には困らなかつたのが幸い。だが、幼いこどもたちもあつて精神的には双方とも苦勞つづきだつたと思う。終戦という明るさもあり三ヶ月

後、皆離れて行ったが、食糧事情は悪く深刻だった。中学三年、クラスの人に頼まれて石けんと米の交換や漁村の生徒のスルメと米の交換に協力したことも記憶に残っている。

ヤミ市^{いち}や買い出し列車、パンパンガールから「赤線」「青線」^{注17}など風俗の乱れも話題になって行く。町かどには白衣に戦闘帽、そば杖^{注18}すがたの傷い軍人^{注19}の姿もあり痛々しかった。さらに二十二年のキャスリーン台風も関東・東北に死者二千二百四十七人を出し、二十三年六月の福井大地震（M七・三 死者三千八百九十五人）など、追いつちの如き天災に苦しむことになるのである。

以上、昭和六年満州事変以来、昭和十六年の太平洋戦争開始―ミッドウェー海戦の敗北―二十年の沖繩守備隊全滅―広島原爆投下―長崎原爆投下まで無謀な戦争と国民の苦しみを見てきた。そしてここで改めて思うことは、政治が国民の真意から乖離^{かいり}してゐたことが悲劇の原因ではないだろうかと思う。今後はこの悲劇の体験を生かし、国民一人一人が国の進む方向が誤まらぬよう政府に働きかけてゆくことが重要だ。

特に広島・長崎の原爆投下など人類としてあってはならぬこと。唯一の被爆国として全世界に一人一人が核不拡散・核兵器禁止へ積極的にかかわってゆくことがいま最も急がれている。

短歌を一首紹介したい。

人間の常識を超え学識を超えておこれり日本世界と戦ふ

南原 繁^{注20}



紀元2600年記念式典（福井県足羽郡酒生村 酒生小学校4年男子） 昭和15年11月10日
中央の若い先生が担任の萬先生（傷い軍人）

数え傘寿を目前にして

池田 勇健（霞紫峯 捨分）（我孫子在住）一九三一年生

「タエガタキヲタエ、シノビガタキヲシノビモツテ」直立のまま、玉音^{ぎよくおん}注21に接した昭和二十年八月の十五日。

—ポツダム宣言^{注22}受諾—

印旛沼海軍航空隊から少年航空兵に合格の通知を受けたばかりの私であった。零戦^{注23}に乗ってお国のためにの毎日だったのに！滂沱^{ほうた}注24ひたすら泣けた。戦争が終った、終戦というよりも負けた敗戦を味わう日々が始まった。

やがて国連軍進駐、マッカーサー元帥の率いるアメリカ空軍が横田基地に、空一面を覆ってやって来た。暫くは陽が遮られて暗くなった。B 16、29、36（Bは爆撃機の略号）。こんな大変な強大国を向こうに廻して戦っていたのか？改めて日本の無謀さを思わされる。「大和魂」それは大切なもの、しかし、まちがった受け取り方は百害あって一利なし。「東洋平和のためならば」と云いつつ、侵略、満州国の傀儡政權^{カイライ}注25、日中戦争（支那事変^{しな}）突入。五、五、三の比率^{注26}からABC D包囲陣^{注27}、遂に真珠湾攻撃、太平洋戦争（大東亜戦争）の泥沼に、シンガポールの朝風にと歌われた頃までは連戦連勝の皇軍^{注28}とみえた戦局も、ガタルカナル、アッツ島、硫黄島玉砕、大東京空襲、広島長崎への原爆（新型爆弾^{シンガタ}）、「東洋の盟主」は夢と砕けた。世界中の人々に多大の迷惑と苦痛を与えてしまった。かつての富国強兵^{注29}、それは体にたとえれば、「免疫力」であらねばならぬ、体にとって免疫力は不可欠なもの、だが、それは体外に出て行って何事かをするためのもの

ではない。然りあつてはならぬのである。真の海外協力、世界への平和貢献を切望してやまない。オバマ大統領は、唯一の核使用国米国は核廃絶を目指すと明言してくれた今、唯一の被爆国日本は声を大にして核によらない平和を世界に叫び続けねばならぬ。

幸い私はイエス・キリストの救いに与^{アズカ}り六十年余世界平和のため祈らせていただいています。共に世界平和のためにお祈りをしようではありませんか！

御教^{ミオシ}へに命捧げめ葛飾^{ワビノ}の侘野^{ハテ}の涯^{コケ}に蘇^{サチコ}となるまで

—捨分—

渡れよや手賀の沼面に幸籠^{サチコ}めて天架けくるる大虹の橋

—捨分— 手賀沼百人一首に入選分—

白樺派こよなく愛せしこの街よ我が孫子まで平和叫べよ

—捨分—

戦中・戦後の思い出

―六十余年前の歳月を辿^{たど}って―

市之瀬 義照（東我孫子在住）一九二七年生

早いもので、戦後と云われてからもう六十年が経って仕舞いました。今、素直に旧制の中学生、大学生、新米の社会人として過ごした戦中・戦後の体験の幾つかを飾り気無く述べさせていただきますことに致しました。

「中学生時代」

旧制中学校^{ほら}。五年に入つて間もなく、学校での授業を放棄して軍需工場へ通年動員されました。（現在の柏レイソルサッカー場）一日三交代制をとりながら、飛行機のエンジン部品の製造に従事しました。毎日のように飛来する敵機を避けて、防空壕に避難する回数は毎日に多くなってきました。もう、夏休みも、冬休みもない、ただ黙々として働き続けることがお国への奉公であり、国民の務めだと信じていました。二十年三月十日、アメリカ空軍による東京大空襲が敢行されました。煙りは空を覆い、炎は夜空を焼き尽くしました。『道路は血に染まり、川は死体で埋めつくされた』と浅草のお菓子屋のお婆さんが話してくれました。浅草寺も総て焼き尽くされ、残ったのは银杏の木だけだったんだよ。食う物は何ひとつ無く、川べりの草をむしって食べたんだよ。とも言っていました。

こうした多くの犠牲者を出しながらも、勝つことのみを信じて生き抜いていったのはいつ体何だったんだろうか。今考えてみれば、厳しい報道管制の中で、国民の戦意をそぐような情報は一切流されなかったことが大きな原因であったと思われる

ます。

翌年三月、中学校の卒業式が学校の講堂で行われました。今日は、ゆつくりと級友と語り合えると思っていたところ、直ちに職場に戻って仕事に就くよう指示が出されました。

今考えてみると、ひと時の余裕さえ与えられない切羽詰まった日本の姿だったのかと思わずにいられません。

「大学時代」

昭和二十年三月、大学から入学式の日時・場所・その他を記載した一通の書類が配送されました。入学式の会場は横須賀近くの海岸に面した工場の寮でした。先生は二人程で、式は上級生を中心に行われました。早速班が編成され、運輸・機械・事務の三つに分けられました。私は、運輸班に配属され、翌日から何台かのトラックに分乗して、関東一円の工場を回りながら、資材の受け渡し、受け入れ等肉体労働に汗を流していました。或る日、教官から呼び出され、「君は八月十五日、学徒防衛隊の一員として皇居と大宮御所^{註31}の防衛に当ることになったので、八月十五日十二時、皇居前広場で行われる結団式に参加するように」との命令を受けました。

この話しを伝えられた各部屋の仲間達からは、もう二度と会うことは出来ないだろうからと、ささやかながらも送別の会を開いてくれました。前日家に帰り翌日の準備をしていた時、新聞社に勤務されている人から、「明日は皇居へ出掛けない方がいい、昼の十二時に、ラジオを通して重大な放送があるから」と言われました。一億玉砕しても最後迄戦い抜こうという放送だとばかり思っていました。しかし、十五日のラジオには、日本は無条件降伏するという玉音が流れました。驚きと恐怖が胸を突き貫ける思いがしました。

“学校生活の再開”

九月から大学の授業が再開するということで、久方振りにお茶の水駅へ降り立ちました。駅前から見る風景には大きな変りはなく、街のシンボルでもあるニコライ堂や幾つかの大学も空爆から逃がれ、戦前の姿を残しておりました。ただ、明大前の坂道を下って九段に通ずる道路に出て見ると、有名な本屋街も跡形なく焼かれ、瓦礫がれきの原に変わっていました。こうした光景は東京の至る所に展開していたのですが、上野駅のホームから見た浅草方面への一帯は、浅草寺も含め完全に焼き尽くされていました。

上野駅の地下道には、家や家族を失った人達が毛布にくるまって夜をしのいでおりました。昼の街には、親を亡くした子供達が、通りすがりの大人達に声を掛けながら靴磨きをしていた姿は、二度と見ることも出来ない姿であったと思います。

戦争が終って何か月経った頃からでしょうか、戦地から続々と復員されて来ました。しかし、シベリヤに抑留注3.2された兵士達は、厳しい労働と飢えと寒さのため多くの命が失われていきました。わたしの兄は四年間の抑留生活を終えて昭和二十四年七月無事に帰ることが出来ました。岸壁の母注3.3が唄われたのも国民の悲願であり、熱い思いであったと思われます。

“食糧難時代”

戦中・戦後の日本は、厳しい食糧難に苦しんでおりました。穀物は総て配給で、一粒の米でも無駄に出来ない厳しい時代でした。若い者の腹を満たすため、芋や野菜を炊き込んで量を増やしておりました。母親の苦労は並大抵ではなかったと思います。

“戦後は遠くなりにはけり”という感傷では無く、逞たくましい日本の創造を願って終ります。

戦争体験から学んだ戦前と戦後と現在のこと

今村賢之助（並木在住） 一九三三年生

「十年ひと昔」とよく言われますが、六十五年も前の事を、いまになってもはっきりと覚えているのはなぜだろうか、と自問自答する。何がそうさせるのかと思います。つい、昨日の事は忘れてしまっても、忘れようとしても、忘れる事ができない戦争の恐怖は、いつになっても、何歳になっても、はっきりと忘れる事なく鮮明に私の心に刻みつけられて残っております。

昭和二十年七月六日の B 29、百二十機による甲府無差別大空襲は、千有余名の死者を出し、私も星が降るように落ちてくる焼夷弾の中を逃げのびて、あの時よく直撃を受けて死亡しなかったのか、と祖母の姿が目には浮かびました。

私は、甲府空襲の前にリヤカーで兄と共に、高田の親戚に疎開の荷物を運んでいた。甲府の千秋橋を渡ったあと、小井川に向っていた時、「突然アメリカのグラマン機の機銃掃射を受けたのです。」気がつく、足から血が流れており、苦痛を感じるより傷口がとても熱く感じました。この事は実際に経験した人でなければ判らない事です。

我孫子市が発行した二〇〇五年度、戦後六十周年平和事業記念誌は、尊い命を失った人が何を語ろうとしているのかを知る資料であり、参考にもなって、これを読む人に深い感銘を与える事になるのです。私もこの記念誌を読んでいるうちに、今迄誰にも言わず自分自身もすっかり忘れていたのですが、それは私の心にある戦争の傷あとです。この事はすっかり忘れていた事を思い出したのです。人生は誰でも迷いや悩み、苦しみはありますが、それを乗り切る事が大切だ。と先生から指

導されたのですが、その逆の事もあって、人生には忘れる事も大切な事だと実感しました。昭和十七年にはシンガポールが陥落し、祝賀会が盛大に行われ、提灯行列に参加し、甲府の町を歩いた事も思い出に残ります。日本も勝ちいくさの時は良かったのですが、昭和十八年にはアツツ島が敗れて、ガダルカナル戦を転機として戦局は日本に不利となり、やがて昭和十九年七月、サイパン玉砕を迎えて敗戦の道をとります。学校では男子生徒は勤労学徒として軍需工場へ狩り出されていきました。未婚の女子も女子挺身隊員^{注3}^{注4}として軍需工場へ送られたのです。戦時中は田植えなどもやって農家の支援をしました。八ヶ岳おろしの吹きすさぶ中を、麦ふみなどもやりました。学校の運動場は、校庭農園となつて食料増産に励みました。甲府の動物園では飼料がなくなり、「虎」が鯉を食べている姿をはつきりと見ました。我々も食糧不足が深刻になつて、魚屋さんのおじさんが太田町公園の鯉を料理して、自治会ごと食用として配給されて利用しました。学校の教育も軍事教練が厳しく行われ、学生には教育勅語^{注5}を筆記させるとともに、暗記しましたので忘れる事なくよく覚えております。ゲートルを巻いて毎日通学しました。勉強していてもB29が飛来するので、サイレンが鳴りわたり勉強が中止になりました。

やがて、昭和二十年八月十五日で終戦になりましたが、戦後の社会混乱はひどいものでした。学校は焼失しているのですから勉強は出来なく、焼け残った学校を借りての勉強ですから生徒数も多くなり、この時、「青空教室で勉強する」という事も経験しました。それも午前と午後に分かれての授業です。教科書なども少くなく苦労しました。学校まで片道三十分ほどかかりましたが、遠距離でしたが困った事ではありませんでした。戦後になって何よりも苦しんだのは、物資不足であり、とりわけ食糧不足は深刻で、セリ、アカザ、クローバー、おおばこ、サツマイモの葉や茎なども食用として利用しました。いまでは考えられない事です。米も配給制度ですから欠配もありました。米の代わりに米軍放出の砂糖が配給されたのには

びっくりして、驚くとともに、アメリカは、経済力のある国だと感じました。母の着物や兄の衣類なども米や小麦粉に交換されました。

あれから六十五年、月日の過ぎるのは早いものです。「光陰箭の如し」です。日本は平和が続き日本経済も逞しく大きく成長発展してきました。どこに行っても物資は豊かにあふれ、人々は何不自由なく生活しておりますが、戦前戦後を思うとき、限りある資源を大切にするとともに、私は、すべてに感謝するとともに、戦争で得た貴重な教訓や体験を生かすとともに、この事を若い世代の人達にも伝えていきたいと思っております。また、これからも社会貢献を続けていきます。

私の戦中体験記

榎本 芳子（緑在住） 一九二一年生

戦後引揚地となった台湾に渡ったのは、父が東京から台湾台北市に転勤するようになった大正十一年、私が一才の時だったそうです。そのおかげで「関東大震災^{注3}にあわずに済んだ」とよく聞きました。

温暖な気候に恵まれて元気に成長、小学校、女学校と無事に通学しておりましたが、三年生になって間もなく日支事変^{注3}がおおきて、戦地へ向う兵隊さんの見送り、慰問袋^{注3}の作成などで忙しい毎日となりましたが、無事卒業することが出来、就職しました。其後、二回の応召から復員した主人と結婚、翌昭和十九年十一月に長女を授かりホツとしたのも束の間、主人に三度目の召集令状がきました。私達は応召したあと実家のある北投^{注3}へ移りました。

しばらくは無事だったと思いますが、だんだん警報^{注4}のひびく日も多くなり、空高くB 29がとんで行きました。特に夜アカアカと灯をつけて飛んで行くのを見るのは口惜しくなりませんでした。時には空が真赤に染まり、本当に恐ろしく、悲しく思っても、唯^{ただ}見ているしか術がありませんでした。

そのうち何事もなく落着いた日が続きましたので、当時台北の小学校で、警備隊員として駐屯していた主人に、娘を見せたくて面会に出かけ、先ず台北の家に寄り、近所の方に挨拶をしている時、突然空襲警報が鳴りひびき、荷物を取りに行くひまもなく、近くの防空壕^{注4}へ走りしました。もう壕^{注4}の中は一ぱいでしたが、幼児を連れていてということ、一番奥へ入れていただきました。ホツとした瞬間でした。ゴーツという爆音と共に、近くに大型爆弾が投下され、爆風で屋根はふつ

とび、ふきこんだ爆風で娘は窒息。私も息苦しくなってもうダメかと娘をしつかり抱きしめた時、又も爆弾が落ちて、再び爆風にさらされたのです。その時娘が息をふきかえし、ギャーと泣き声をあげたのです。もううれしくて、恐さも忘れて娘を抱きしめました。あの時の、気持は一生忘れないことと思います。

其後我家の方を見ましたら、二階がなくなっており茫然ぼうぜんとしてしまいました。

それから娘を背負い、北投への三里の道を歩きはじめましたが、途中何回か警報がなり、飛行機の姿を見乍ら、台湾の方の壕に入れていただき乍ながらやつと帰り着きました。

後に私の通った女学校も爆撃で破壊され、先生方もお亡くなりになったことを知りました。あの五月三十一日は台北大空襲の日だった訳で、よく生きて帰ることが出来たと今も思い出します。其後も相変わらず灯火管制などきびしく言われていましたが、夏の暑い日、庭で野菜の手入れをしている時、ラジオで終戦だと言っていると声かけられ、あわてて、ラジオの前に座りました。

天皇陛下のおごそかな御声を拝聴して、全身から力がぬけ、ガタガタとふるえました。

「日本が負けた」と改めて感じたとき、悲しさと口惜しさがこみ上げてなりませんでした。

戦争が終わったら静かになると思ったのは、早すぎで、近くの事業家の方の別荘が襲われて、銃声が聞こえてきて危険を感じ、ハダシで逃げ出したこともありました。

そのうち、主人や義弟、私の弟も復員注4して賑やかになりましたが、思いがけない本土への引揚命令がでて、期間が短く整理、準備に追われる毎日となりました。

持物は現金一人一千元、衣類夏冬三枚づつ、布とん一組、枕二コ、貴金属はダメ、時計一但し体に着れるものは何枚着て

もよいとのことでしたが、母乳を飲ませている私は諦めるしかありませんでした。

二十一年三月、いよいよ我家をあとに出発いたしました。総督府^{注44}に集合、自由時間があつて、或人は名残りの台湾料理を食べに行った人もありました。我家は主人が希望は？と聞きましたので、思わず「一六のカステラ」と言ってしまったことを思い出します。カステラならおじいさんも子供にもやわらかくていいだろう！と思ったからでした。

其後基隆港^{注45}に到着、船着場に近い倉庫に到着しました。荷物調べや、体の検査などあつて、乗船を待ちましたが、先の人たちが終わっていないとのことで、翌日になつてやつと乗船の聲がかかりました。「リバティ^{注46}」という輸送船の船底の方へ案内されました。人が一ぱいで足をのばすこともできないほどせまく、とても心配でしたが、内地^{注47}へ帰ることができるという希望だけで頑張りましたが、出港してからの船酔に苦しみ、甲板のトイレに行くのも大変難儀でした。其内母乳は出なくなり娘は日に日にやせて小さくなるので、見るのが辛くとても悲しいことでした。併し^{しか}主人や義弟が本当によく面倒を見てくれましたので、何とか凌ぐ^{しの}ことができたのが感謝でした。

一週間ほどで田辺港^{注48}に着きましたが、ここでも先着が上陸をしていないので一晩待たされ、そこに見えているのに上陸できないのはとても辛いことでした。翌日やつと上陸、本土をふみしめました。

ここでも検査があり、DDT^{注49}の粉をふりかけられました。其後お弁当が運ばれ、どこからかお赤飯だ！と聞こえてきて、ワクワクしましたが、本当は「コウリヤン^{注50}」の御飯でしたが、それでもとてもうれしゅうございました。

それからそれぞれの行先に向つて列車上の人となりました。我家は山口県の岩国でしたので、かなり長時間の汽車の旅となりました。

途中京都では、白い御飯のお弁当をいただいて元気をとり戻し、旅をつづけ岩国に着きました。三月というのにプラット

フォームは霜柱で、台湾育ちは寒くてふるえました。

一晚の宿を求めて旅館の前に立ちましたが、疲れ果てた地下足袋^{注5}姿の私たちにより返事がなく、何軒目かに宝のように持ち帰った砂糖を差出したらやっと泊まることができ翌日無事に親戚の家に着きました。

お母様と息子さん二人の御家庭でしたが、快く迎えて下さり、一部屋お借りしてやっと一家五人の生活が始まりました。そして、安らかな眠りにつくことが出来ました。

大事に貯蔵しておられたと思われる品々を惜気もなく出して下さり、畠の野菜などまだ早いと思われる物迄掘ったり取りたりして、御馳走して下さいました。本当に有難いことでした。其のうち義弟は仙崎^{注5}に職を得、私たちは東京の主人の従兄を頼って上京しました。駅迄見送って下さったお婆様が、発車した列車を追って「思う様にならなかったらいつでも帰っておいで待ってるからね！」と大声で呼びかけて下さったお姿は一生忘れられません。

上京後主人は、従兄の家業建築の方で、代々木の練兵場に米軍の住宅を建てておりましたので、それを手伝っていたのですが、長い戦地生活上、引揚の疲れ等が重なって、遂に倒れてしまいました。従兄も色々手を尽くしてくれましたが、当時東京で入院療養することは不可能であることが分かりましたので、佐賀の療養所の医務課長をつとめる私の従姉の御主人のお世話でその療養所に入るようになりました。主人は治りたい一心で遠くの九州迄行ってくれたと思い、すまなく思いました。私は実家の父の世話で岡山の会社につとめ、子育てし乍ら主人の回復を待ちましたが、残念なことに一年後に亡くなりました。遠かったので最期に間に合わず、言葉を交わすことは出来ませんでした。残された日記に心打たれる文章を発見して、子供や家族に対する愛情の深さに唯々感謝しかありませんでした。

其後義弟の世話で上京し、よい就職口に恵まれて二十余年つとめあげ、現在に至りました。

引揚以来、各地を廻りましたが、其土地、土地で本当によいお方にめぐり合い、お世話になつての今日がある！と心から感謝申し上げて居ります。貧しかったけれど、心豊かに過せたことは私にとって何よりの財産で、感謝の気持ちを忘れずに元気でこれから先も過したいと思っております。

火の海の中を逃げた（東京大空襲）

大川 昭子（新木野在住）一九三七年生

私は、本所（現墨田）区、厩橋うまやで生れた。家は、乾物屋を営んでおり、父が早朝より大きな鉄釜で豆を煮たり、ひじきを炊いたりした惣菜や、佃煮を売っていた。

我が家の前は、小さな町工場、左隣は銭湯、床屋、右隣は花屋、蕎麦屋、この様に小さな家が軒を連ね、人々が行き交い、こども達の声が響く下町。

きょうだいは五人で、兄十六才中学生、姉十三才女学生、すぐ上の兄五年生学童疎開で、千葉から岩手県花巻温泉へ行っていた。妹四才、そして私は七才、外手そとで国民学校一年生。姉のおさがりの赤いランドセルを背おい、母手作りの防空頭巾注を肩にかけ、住所、名前、血液型を書いた名札を服の胸に縫いつけ、通学していた。

その日、一九四五年（昭和二十年）三月九日。朝から晴れていた。深夜、一回目の空襲警報が発令され、いつもの様に一番先に目を覚まし縁の下の防空壕に逃げた。B 29が飛び去り又、布団に入った。二回目の空襲警報がなり、又、防空壕に逃げこんだ。しばらくすると、B 29の低空飛行音が聞こえ、焼夷弾の落ちる音が聞こえる。父が「今日はいつもと違う。火の手が、あちこちにあがっている。天理教の地下室に逃げろ」と叫んだ。

天理教の建物は鉄筋で、地下室は、強固で安全な避難場所だった。近所の人達は、もう逃げてしまったあとで、しんとしていた。姉は「家の火を消す」と言って動かなかった。姉を引っぱり、女四人は天理教の建物へ急いだ。母は妹をおぶい、

私は服などが入った大人の大きなリュックを背おわされた。

やっと建物に着いたが、地下室は人がいっぱいに入れてもらえなかった。道に掘られた防空壕も人がいっぱいいて「子どもがいるんです。入れて下さい」と母が頼んでも中には入れてもらえなかった。仕方なく諦め、安全な所へ逃げようと走った。

逃げる道の右も左も家々が燃え、電柱が燃え火の海。近所の男の人の声。「隅田川に逃げろ」大勢の人達と火に追われ、川に向った。そこも人、人。妹をおぶっていた母の半天に火がついた。

「いやだ。泳げない」と言う私を母は川に突き落とす。三月の冷たい水。干潮だった。川に飛び込む時、投げ込んだリュックの上に立ち、誰の物とも知らない布団を濡らし、頭の上にかぶり、火の粉を防いだ。

燃えている舟のへりに、何人かがつまみ「南無阿弥陀佛なむあみだぶつ」と唱える声も聞こえる。その舟が私達の方に流れてくる。川添いにある「ライオン歯磨工場」の薬品が絶え間なく大爆発し、炎の中に大きな物も吹き上げられ、燃えていた。本当に恐ろしかった。

火がおとなくなつたのは朝方、うす明るくなつてからだ。満潮になつてきた。

丁度、板があつたので川縁ちに立てかけ、上ろうとしたが、着ている服やリュックが、水を吸い込んで重くてなかなか上れない。

目の前の東京の姿は一変していた。

家々は燃え尽き、焼け野原になつていた。

服が燃え、マネキン人形の様になつていしかばねる屍、まっ黒になつていしかばねる屍があちこちに転がっていた。怖いという感覚はなかった。

私達四人は自分の家の焼け跡をやっと見つけた。父が帰ってきた。姉は父に抱きついて泣いた。父は警防団非常食係だったので、缶詰等を守るため学校へ行った。学校にも火が付き、隣の若宮公園の池に飛び込み助かった。兄はなかなか帰ってこなかった。皆、とても心配して、もうだめかと半ば諦めかけた時、帰ってきた。目は火傷でまっかだった。

兄は私達四人が逃げたあと、リヤカーに布団をくくりつけ一人で逃げた。火に追われ、深川の猿江国民学校に逃げた。が、炎は校舎にも燃え上がり、屋上に駆け上がった。が、火がせまり、雨樋を伝わり下に逃げた。下は死体でうまっていた。その日一日で、約十万人の生命が奪われ、深川の叔父家族五人のうち二人、亀沢町の叔父夫婦は二人共亡くなった。天理教の地下に避難した人は全滅。床屋の家では疎開した子だけ残った。家族全員が助かったのは珍しく、生死は紙一重。とばされそうな強風の中、兄に手を引かれ、田端の伯母の家へ一時避難するため、長い道を歩いた。集団疎開していたすぐ上の兄は、栄養失調で頭がおできだらけになって、終戦後疎開していた小山の家に帰ってきた。今でも夜、飛行音がすると、B 29や空襲を思い出し、ぞつとする。

今日、当時の隠されていた事実を知る事が多い。情報を都合よく操作し、国民はそれを信じ、戦争に巻き込まれた。世界中から核兵器や戦争がなくなり、平和な暮らしが出来るよう、生きている私達が声を出していく。戦争を知らない人達も、悲惨だった歴史の中から、多くを学んで、平和な世界への舵とりをしてほしい。戦争の体験は、私達で最後である様にと念じます。

歴史としての台湾引揚

小倉 正久（根戸在住）一九三一年生

昭和二十一年三月二十八日夜、私共家族六人は台北^{注54} 駅前広場に野宿していた。

敗戦で日本は台湾領有権を放棄、兵士は送還と決まった。十四歳の私は「一般邦人に混じって生きよ」と現地除隊^{注55}となる。邦人三十二万、日本兵十六万が残されていた。国民党は大量の米を台湾で徴発^{ちょうはつ}、大陸^{注56}に送り物価は数十倍に高騰。

総ての日系資産も接收し軍備にあてた。生活手段を失い糧に窮した日本人は家具や衣類を売り露命をつなぐ。二十年暮、軍人の送還が始まる。中国は帰国する日本人の携行品は、背に負える一担^{ひとかつぎ}の衣服寝具、若干の米、現金千円のみと制限した。帰国予定地の申告も必要であったが、本土との連絡は絶たれ、安否不明の親戚名を書き子供だけで帰国したのも少くない。予定先のないもの、現地人と結婚していたものは残留を余儀なくされた。

妹は疎開中マラリヤに罹患^{りかん}し高熱を繰り返していた。母は「死んでもいいから娘と残りたい。」国策^{注58}により台湾に渡り、戦時中は山中で疎開生活を強いられ、生きる気力を失っていたのであろうか。しかし兎に角、励ましあい、家族全員で帰るしか道はない。

台北駅前広場に集れば、引揚船に乗れると伝えられた。数百人集合していただろうか。翌朝無蓋貨車^{むがいかしや}で基隆^{きりりん}へ。倉庫で一泊。三十日午前、銃を手にした中国兵による所持品の検査。目ぼしい宝石貴金属類は没収された。

米国はリバティー型貨物船（七一八〇噸^{とん}）百隻を日本に貸与。旧海軍軍人商船船員らが運航し、邦人の帰国業務にあたつ

た。舂はしげ注^{6.1}で船に近づきタラップを上る。高熱の妹は自力で登ることができない。私は三十キロの荷物の上に妹を背負い、揺れる約四十五度の梯子はしこを登った。

灰色の船体に大きく白で四十四。上では若者が手を伸べてくれた。甲板に炊飯の釜、急造の便所が両舷から外に突き出ている。排泄物はそのまま海上に直行。船倉内には裸電灯が揺れ床は板敷、一坪に数人。換気はない。「気分が悪い時は甲板に出て空気を吸へ」と。まさに歴史教科書で見た奴隷船と同じ。

三月三十日夕刻出港。複雑な思いで山影を眺めていると、岸壁に日章旗を振る若い日本兵の姿。彼らは全邦人が引揚船に乗るまで台湾を離れないと語っていた。

当時の台湾人が書き残している。

「日僑注。今や天地回りて国に去る。天を恨まず。地に嘆かず。黙々として整々とさる。∴日本人恐るべし。」(林茂生)

沖繩奄美の島影を望み一路本国へ。洋上では触雷注に備え脱出訓練が行われた。船倉から甲板への階段は僅か一本。助かる確率は低い。船酔いに苦しむものも続出する。潮風に吹かれ風呂もなく、首筋が化膿し寝られない。

船の給食は一日二回。飯に味噌汁をかけたもの。洗面器から食物を食べた経験は後にも先にもこの時だけ。犬猫の餌と何等変わるところがない。

出港間もなく中年婦人が高熱で隣に伏せていた。数日後全身に赤い発疹。天然痘の発生である。船全体に蔓延まんえんする危険は避けられまい。急ぎ別室に隔離。

豊後水道から瀬戸内を船は進む。美しい島々、穏やかな海。伴走するイルカの群れ。宮島の桜と朱の鳥居が美しい。四月三日午後二時、引揚地大竹沖注に投錨。

乗船者は一般人三千五百二十六名、復員兵二十八名。天然痘の婦人は短艇で運ばれて行き、乗船者は船内に隔離。九日午前九時上陸。さらに潜伏期が過ぎるまで海兵団宿舎に留め置かれた。

二十日、一世帯一枚の引揚証明書、落ち着くまでの無料乗車券、一人千円の新円が配られた。日本の郵便貯金通帳・戦時国債^{注5}は取り上げられた。払戻能力を失った政府が取った処置である。六十年後返還すると公告したが、受取人は既になく国庫に収納された。すべての引揚者の生活再建は、この千円から始まった。

二月から三カ月間に、実に二十八万四千五百五名が台湾から引き揚げた。乗り遅れた者は翌年の台湾争乱に巻き込まれることになる。衰弱した妹は程なく他界した。

日本は大戦で三百十万人の人命を失い、十四歳の少年まで軍隊に召集した。戦後も在外邦人を守る義務を果たし得ず、棄民^{きみん}に近い扱いをした。国家が犯す過ちのなかで、最も愚かしい残酷な出来事であった。

昭和三十七年、穏やかな手賀沼の畔^{ほとり}に居^{きよ}を定め、ようやく私の引き揚げは終了したのである。

私の八月十五日

尾張 幹（つくし野在住）一九三四年生

私の実家は京都府福知山市で、京都から北西へ八十キロ、大阪から北へ九十キロに位置している。昭和二十年八月十五日の数日前から、小学六年生の私は夏休みで祖父の家に滞在していた。そこは農家で、私の家から市の東を流れる由良川にかかる音無瀬橋を渡って、子供の足で四十分ぐらいの距離だった。戦争は苛烈^{かれつ}を極め、新聞は東京・大阪はじめ日本の各都市への空襲の模様を連日報じていた。空襲の無いここ福知山地方でも、郊外に陸軍の飛行場があり、さらに北東の山の向こうの舞鶴には海軍基地があつて、連日のようにB 29が爆音と飛行機雲をなびかせて上空を飛んでいた。

十五日の朝、祖父が今日の昼にラジオで天皇による重大放送が行われるという。天皇自身による放送なんて滅多にあるものではないが、きつとそれは戦意高揚に関連あることが放送されるものと勝手に類推した。というのは数日前に特殊爆弾が広島・長崎に投下され、さらにソ連が中立条約を破つて満州に侵入し、戦局はいよいよ重大な局面を迎えていたからだ。天皇はわれわれ国民に戦争完遂のため一層の努力と義務を強く要請し、ソ連に宣戦を布告する放送だろうと子供ながらに見当をつけた。

正午きっかりに放送は始まった。初めて聞く天皇の声は甲高く、発する言葉が小学生の私には難しく、かつ喋り慣れていないためか抑揚に乏しく、非常に分かりにくい。さらにラジオの雑音が大きく、そのため一層内容が聞き取りにくかった。それでも放送が済むと、戦争は終わったのだという大意は感じ取ることができた。「……忍びがたきを忍び……」という

一節が今でも耳に残っている。不思議なことに、聞き終わった時は特にこれといった感情や感想は年齢のせいかな湧いてこなかったように思う。

その後、祖父と祖母と三人で昼食を取った。黙って、なにも喋らなかつた。三人とも。外はぎらぎらと日が照り、蟬がしきりに鳴いていた。無言の食事だったので、蟬時雨が一層耳についたのかもしれない。

日が暮れて、近くの丘に上がって町の方を見た。ところどころに灯がまたたき、明るくなって、音無瀬橋がぼっと浮かび上がって見える。昨日までは灯火管制で真っ暗闇だったのに。なんという違いだろうか。この時、戦争はやつぱり終わったのだと実感した。そして明日は今までとは異なる明日になるとの思いが体の中をつき抜けた。

あの日から六十五年。人間でいえば還暦を上廻る年月だ。だけど心理的には複雑で、長い道程だったと同時に、あつという間でもあつた。長いようで短く、短いようで長い年月だった。あの年あの日のインパクトが一生のうちでもあまりにも強烈だったせいだろう。敗戦という前代未聞のショックに呆然とした状態、飢餓寸前の食料難、急激な価値観の転換など日本本の悲惨と貧困ここに極まれりという状況の中でも、われわれ少年の気持ちには、何とか早く立ち直りたい、旧制中学に進んで自分なりに人生を創つていこうという健気な気概と微かな希望があつたように思う。

かつて明治維新の前と後に生きた福沢諭吉は「一身にして二代を経るは至難のことなり」と述懐している。一人の人間が社会原則や価値観の全く異なる二つの時代を、それぞれの社会的役割を担いつつ生きるということは、いかに難しいかを自らの苦心と体験に照らして漏らした言葉であろう。

諭吉の場合は「一身にして二代」だったが、われわれの世代はその倍の「一身にして四代」を生きてきたといえるのではあるまいか。①あの八月十五日までの戦前・戦中の時代、②敗戦による社会原則と価値観の転換と混乱の時代、慢性的空腹、

貧しさを耐えた時代、③ようやく日本の復興がなり、経済成長を続け、物質的な豊かさを実感・享受した時代。そしてわれわれ一人ひとりが社会の中で核としてその発展を担ってきた時代。④昭和から平成にかけてがその転向点となるうが、経済一辺倒の時代から次のステップの成熟化社会に生きている現在のわれわれの時代。社会の第一線から大抵は退き、今までは家族のため会社のため社会のため―他のために働いてきた段階から、自分を自分なりに見つめ直しながら生きている今の時代。こうした四代の姿を、すべて自分の肉体・肉眼を通して体験し観察できたわれわれの世代は、ある意味で稀に見る幸福な世代といえるだろう。

①から③までは、われわれは同じ時代を生きた者として、程度の差こそあれ同じ実感を共有しているに違いない。ところが④は人によってさまざまだ。共有できる生活態度や価値観もないわけではないが、①から③時代にくらべて少ないことは否めない。むしろ異なる面のほうが多いだろう。家族、親戚、友達など身近な人が鬼籍に入ったり、本人が闘病生活を余儀なくさせられたりして、生活基盤が激変した人も少なくない。まさに「人生さまざま」だ。ライフスタイルも価値観もそれこそ百人百色だろう。

いずれにせよ、何をしてよい身分だ。誰も文句をいわない。あくまで自己流を通すもよし。奉仕活動するもよし。資産運用に熱中するもよし。無為むい徒食とじよく・無芸大食も悪くない。英会話や四国遍路はお奨めだ。パソコンに向かい合うのも結構。何をしても良い。だが待てよ、これじゃ一寸ちよつとさびしいじゃないか。社会から当てにされない、期待されない、誰も評価してくれない、何か心の糧になるもの、支えになるものが必要だと誰しもウスウス感じているに違いない。それになんといって、いつ病で倒れるか、別離の日の不安も大きい。

これらを自分なりに総括するのが④の時代に生きる者の最終目的には違いない。でもこれは理屈。真剣にこれらに向き合

うことは恐ろしいし、そんな勇氣は持ち合わせていないうえ、私の能力の限界をはるかに超えている。それを避けて、何となく流れるように、ゆったりとまた同時にせかせかと、過去と現在と未来を眺めながら、星と酒と *etwas*^{注66} を友として毎日を通すこともまたいいではないか。これこそ④の時代まで生きてきた者の数少ない特権であろう。

「終わりよければ全てよし」というコトバは自分に有利なように自由自在に解釈できる実に便利なコトバだ。この名句を發明したシェイクスピアに敬意を表して乾杯しよう。

戦後六十五年に思う

川上 進也（東我孫子在住）一九三四年生

太平洋戦争が終ったのは私が十歳、国民学校初等科（＝小学校）の五年生の時だった。以来六十五年の星霜せいそうを経た。あらためて歳月の流れの速さを思わずにはおられない。

その戦争は私の一年生入学の年（昭和十六年）に始まった。私の育った筑波山麓の村（現つくば市）には陸軍の飛行場があつて、そこここに兵隊の闊歩かっほする姿が見られた。時に従兵注67の引く馬に跨またがった高級将校も通った。そのように軍人は極めて身近な存在であり、少年時代の私の憧れでもあつた。

当時の遊びといえは「兵隊ごっこ」や模型の飛行機づくりがほとんどだった。その頃の私は少年航空兵になりたかつた。まだ幼かつたので、陸軍士官学校や海軍兵学校などの職業軍人への道を考えるまでの知恵はなかつた。

終戦（正しくは敗戦だが）は昭和二十年、夏休み中の八月十五日だった。その日は天皇陛下の玉音放送があると言うことで、家族がラジオの前に集まった。電波状態が悪いせいによく聞き取れない。もし聞えても幼い私には事の重大さは理解出来なかつたろう。

「負けた、終りだ」祖父はポツリと言った。

（もう、少年航空兵になれない―）一瞬そんな失望感が脳裏をよぎつたが、他のことはあまり覚えていない。とにかく、その日が滅法暑かつたことだけが強く印象に残っている。

何よりも戦争が終わったことを一番喜んでいたのは母であり、祖父母だった。九月になって、召集されていた父も海軍から復員してきた。一年半ぶりに見る日焼けした父の顔は、眩まよしかった。末弟はきよんととしていた。

そして数日後、祖父は伝来の刀とか、日露戦役で貰った自慢の金鷄勳章注68や功労章などを庭の隅に埋めた。理由を聞くと、占領軍に見つかるは大変だから、と言うことだった。

その翌年、学制が変わり、現在の義務教育としての三年制の中学校がスタートした。つまり、私たちは国民学校最後の卒業生となり、そのまま全員が中学校の最初の一年生となったのだ。中学入試がなくなった安堵あんどと、目標を失ったような落胆がないまぜまぜになった複雑な心境だった。私の年次は、さきの国民学校への改称に始まり、戦前〜戦後にかけて、いつも制度の変り目に遭遇してきたようだ。

その中学校も新築校舎の竣工が間に合わず、小学校の広い講堂を区切って教室にしていた。特に歴史の教科書は大きく塗り替えられ、社会科では新しい憲法を学んだ。軍国主義に支えられた学校教育は当然のことながら全面的に否定され、欧米並みの民主主義を標榜注70するものとなったのである。

それにしても、幼児期からの成長過程での教育の大切さ、影響の大きさを思わずにはいられない。かつては何の疑問も持たずに「早く兵隊になって、お国のために頑張りたい」と考えていた私。その私は戦争がなくなって、人を殺すことも殺されることもなく、古希を五年も過ぎて平穏に生きている。

戦後の廃墟と飢餓から立ち上がったわが国は、その後の高度成長期を経て今や世界に冠たる経済大国となった。サラリーマンだった私も企業戦士としてその一翼を担った自負はある、が、仕事にかまけて家庭を犠牲にしたことも否めない。それが組織への帰属意識や忠誠心のせいだとしたら、あるいは戦中に受けた教育の影響だったのかも知れない。

ともあれ、今の私はすでにリタイアの身。些かの年金を頼りに、趣味を楽しみながら、何とか生活ができているのも平和の世なればこそで、有難いと思っっている。

加齢とともに記憶力の衰えを感じる昨今だが、六十五年前の玉音放送の日の、あの暑さだけは今でも忘れられない。

終わりに、拙吟^{せつぎん} ^{注7.1}を添えて^{かくひつ} 摺筆^{注7.2} させて頂く。

ただ暑き日とのみ記憶終戦日

進也

私の戦時体験記

倉持 布く（寿在住）一九一五年生

昭和二十年八月九日の早朝ドカンドカンと大きな爆発音がしたので、私は驚き外へ出てみると、官舎の一ヶ所に火煙りが揚がっているので隣家の母娘オヤコと防空壕へ飛び込んだ。体を寄せ合いひたすら合掌がつしやう。何度かの爆音がなり外へ出て見ると、消防のサイレンが聴こえ街の空に火煙りが揚があってゐた。その内メガホンを持った隣組注73長さんが「ソ聯れんの空襲だから速く避難をしなさい」と叫び廻る声に官舎住民は皆驚き、直ぐ避難準備に追われた。

旧満州国の最北海拉爾市注74に住んでいた私の戦争体験は、応召中の夫が留守の官舎で浴びたソ聯軍の爆撃から始まる。海拉爾ハイラル駅も被害に遭ったのか避難の汽車は東海拉爾ハイラル駅からとの市の指令で街路はごった返し、私達官舎住民は役所へ集合との通達で身支度をし、急ぎ集合。トラック五台に分乗し煙火くすぶる市街を通り抜け、街を囲む丘陵地の草原に着いたのは夕方七時頃。その時私達の乗ったトラックが故障で動かなくなり、下車して待つ間に見下ろした市街は、ソ聯の戦車隊が火を吐き乍ら走り弾薬庫の爆発音が凄くナシ聞こえた。トラックの修理は駄目で皆が歩き出した時、急に空が明るくなり曳光弾えいこうだんがゆらゆらと降って来るや草一本見える程の明るさになり、驚いた私達は草の中へ身を沈め機銃掃射の難を逃れた。其の草原に兵隊の列が来たので私達も傍らを歩き始めると、「我々は陣地へ行くから皆は鉄道線路を南下しなさい」との声に草丈深い夜の野原をうろつき探し廻りやと線路にたどり着いた。その線路を歩く人影が暗い中に見えたので声をかけると、汽車に乗れなかった人だと判り一緒にひたすら歩く。其のうち地下足袋の底は破れ足の底は豆だらけ、苦痛の絶頂。親には

ぐれた子供の泣き叫ぶ声、歩けず線路に座り込む人。一人減り二人減りして集団はいつしかばらばらになったが、私は歯を喰いしばって歩いた。夜が次第に明るくなり尚も歩きやと眩野こうやの中に駆らしき小舎を見たのは正午近き頃。

そのホームにたどり着いた人は誰も口をきかず寝ころんで仕舞った。その後迎えの汽車が来たのは午后。日本では想像も出来ない満州の眩野こうや、駅と駅の区間は何十キロ？

駅近くの村に住む小さな家が散在するだけ。やと乗車出来た日本人は幸だったが、取り残された人や泣き叫んでいた子供達の其の後は判らない。最終の汽車に乗り安堵あんどの身を居眠りすること何時間か、又もや爆撃で眼が覚めた。

興安嶺障地コウアンレイ注76。に入る日本軍とソ聯軍の交戦の飛ばつちりを浴びたのだ。死人怪我人も沢山出た為、停車が伸びて仕舞い、避難民の終結地齊々チチハル注77。に着了いたのは八月十八日。その時初めて日本の敗戦を知った。戦災を受けなかったこの街の公会堂にひと先づ収容され食事医薬品衣料などの配給で一週間位休養した。

其その後住居の相談があり、空校舎に入る人、市在住の日本人民家に同居させて貰う人等、寒期を迎える避難民に市からの援助があった。

而しかし、その頃市街に侵入して来たソ聯兵の暴行、泥棒は満人にも及び避難民である私も腕時計を盗られた。尚又日本軍隊の倉庫にあった糧秣りょうま注78。や其の他の物資を、市在住の日本人男性を召集しトラックに積み込ませ全部本国へ運んで仕舞った。日本の敗戦に乘じ演じたソビエト軍の悪行は許し難い。其の蛮行が納まった頃、日本人会と云ふ救済会が出来て難民の相談にも応じ就職斡旋などもして呉れた。私は元呉服商だった家に同居させて貰い、中国人の靴問屋の店へ通ひ女中として働いたのでどうやら生活出来たが、衣食住を失った難民、特に小さい子供のゐる女性は街中で物乞いをし、みぢめな活き方に耐えていた。昭和二十一年夏頃やと帰国の段取りが出来、市在住の日本人全部の引揚げは避難民から始まり、私は九月中旬

頃駅へ。乗車は牛馬や石炭を運ぶ貨車、其して身動きも出来ない程ぎゅう詰め状態。眩野の日に晒さらされ雨にも濡れた。貨車が野原に止まれば貨車から降りて用足しも。恥も外聞も無かった。帰国の喜びで皆の胸が一杯だったから。貨車が眩野を走っている時、前の車輛から男性の声で、「産婆は居ないか」の連呼。水一滴もない貨車の中での出産とは皆驚くばかり。産婦や赤ん坊の其の後は判らない。貨車は哈爾濱ハルビンで止まり下車させられ、川原に持参の荷を広げアメリカ軍の検閲が有あったりしたので、中国南端のコロ島に着いたのは九月末頃。帰国する船は貨物船なので、船底へ目刺を並べた様に寝た。三食お粥と梅干し、翌日やっと九州博多湾に着いた。沖に停泊した船の甲板から遠く眺めた「祖国日本」。何千人かの男も女もみんな泣いた。

以上六十四年前の私の戦争体験を臚おぼろとなった記憶を辿りながら記した。当時私は三十歳、夫は海拉爾陣地ハイラルで交戦、敗戦後はソビエトの捕虜となり、炭鉱重労働の為栄養失調で昭和二十三年に帰国。

大東亞戦争の発端は、当時の国政権力を握った陸軍大将東条英機らの横暴極まる権力に由来する。敗戦後戦犯としてアメリカ軍に処刑された戦犯者の霊を後日靖国神社に祀った事、腹立たしい限り。

輸送車に敗戦の子を産み落す

布く

スルメと平和

越岡 禮子（寿在住） 一九四二年生

広島に原爆が投下される前夜の昭和二十年八月五日、群馬県前橋市ではB 29、約三十機による空襲があった。波状攻撃で焼夷弾の雨を降らせ、全市が火の海になり焦熱地獄だったという。民間人の死者は五百三十五人、負傷者は約六百人と、後に前橋市役所から発表されている。

その八月五日は私の三歳の誕生日であった。当時、父は新前橋にあった理化学研究所の技師であった。母は工学部を卒業している父に出征はないだろうと、東京の虎ノ門から前橋へ嫁いできた。しかし、父の仕事は東京の本社に出張することが多く、その夜も不在であった。

三歳だった私は当日の記憶は薄い。空から何か光る物体がヒラ、ヒラ、と数多く落ちてきたこと、利根川の河原で布団や掻い巻かきまきを水に浸して身体を被い、逃げ惑う家族の群や、必死で母に手を引かれて炎の中を逃げ廻ったことを断片的に覚えてる。

いつもは和服姿の母がこの夜は父の革靴をはいていたこと、熱風が渦巻く中、死を覚悟したのか、母が私を強く抱き締めくれたことも頭の片隅に残っているが、これは後に母が父に話をしていたことを記憶のように勘違いをしているのかもしれない。

幸いにも私達母子は空襲で命を失うこともなく、我家のある駅裏一帯の住宅地は無事であった。国鉄前橋駅から北に広が

る繁華街や県庁、住宅地などは無残な焼野原となった。

私には戦争の記憶として強烈に、確かに、身体で覚えていることがある。

群馬県は養蚕の地として知られている。駅前に繭まゆや生糸を納める大きな石造りの倉庫が何棟か並んでいた。傍らかたわに大きな池があり、なかなかの風情であったと聞く。戦時中は空襲直前まで、その倉庫に配給の物資が納められていた。

八月六日、空襲のあった翌早朝、母は一人娘の私を急き立てて、近所の人達と一緒にブリキのバケツをさげ、その倉庫へと馳せた。

幼い私は我家を出るなり異様というか、香ばしいというか、子供心にもすぐわかった。町中がスルメの臭いで一杯なのだ。駅前の倉庫はその日、県内に配給されるはずだったスルメが大量に在庫されていた。石倉が崩れ、炎をあび、在庫品が焼けコゲになっていた。毎日の食物が事欠く時代、母達は内心一枚でも多くと逞たくましく、そのスルメを拾いに行ったのだろう。三歳だった私に、その強烈な臭いは生涯忘れない嗅覚として残った。

六十数年を経た現在、私の家族はハレの日や酒を楽しむ時、大きな分厚い肉のスルメを炙って食べる。皆、好物だ。そのスルメを裂きながら私はいつも思い出す。あの昭和二十年八月六日のことを。

原爆があと一日早く前橋の町に投下されていたら…。あのスルメを皆で拾っていた時間に世界最初の原爆が広島を地獄絵のようにしたのだ…。などと。

少し複雑な気持と共に、今、平和な毎日を過ごす幸せを感謝し、再び戦争をおこしてはならないと、心から願うスルメの思い出である。

少國民^{注80}の思い出

齊藤 郁子（寿在住） 一九三一年生

私は一九三一年、東京で生まれました。その年に満州事変^{注81}、小学校^{注82}入学の前年に盧溝橋事変^{注83}が起きたのですから、正に日中戦争の最中に育ったわけです。平凡なサラリーマン家庭でしたが、休日にはよく父親が私達を連れて外出しました。行先は明治神宮をはじめ乃木神社^{注84}、東郷神社^{注85}という処でした。時には映画館にも行きましたが、ポパイの漫画が少し、大方はニュース映画で日本軍が戦果を上げたというものでした。三年生の頃までは平和な日常生活を送っていましたが、四年生になる時小学校は國民学校となり、十二月八日大東亜戦争^{注86}が始まると子供達も銃後の少國民となりました。校庭に整列する時も小隊を組み、級長は小隊長となつて「頭^{かしら}つ右」等と号令をかけるようになりました。体育の時間には男子は剣道、女子は薙刀^{なぎなた}、音楽の時間には軍歌、学芸会の劇も「出征兵士^{注87}を送る歌」など、子供達も自然に洗脳されていたような気がします。そして子供なりに戦争には必らず勝つと思ひ込み、その為にはいろいろ我慢をし、強くならなければいけないと心に誓っていたような気がします。その頃の標語に「欲しがりません勝つまでは」とか「進め一億火の玉だ」等がありました。家では母達が國防婦人会^{注88}などといって、今までの着物姿がモンペとなり白い割烹着に襷を掛けて千人針^{注89}や慰問袋を作ったりしていました。又隣組の常会が時々有り、本土空襲に備え話し合いがされていたようです。そして家のガラス窓には紙が貼られ電灯には黒い布が掛けられました。各家の玄関先には防火用水を備え、庭には防空壕が掘られました。時にはバケツリレーの訓練もしていました。

その頃学校で「今日は校庭に出てはいけません」という日が何回か有りました。教室の窓からそつと見ると、白い布に包まれた物を胸に抱きしゆくしゆく進む列が講堂に入つて行きます。あれは戦死した兵隊さんの遺骨だと思いました。そして子供心にも弟を戦争に行かせたくない、戦争に行かなくても飛行機を造る人も必要なのだからと真剣に考えていた事を今も忘れません。

当時は六年生で旧制中学（女子は女学校）を受験しました。それなりに勉強をして、希望校に入学する事が出来ました。がその頃、國民学校の児童に疎開命令が出、私の三才下の弟が対象となりました。縁故で行く処の無い者は集団疎開となります。両親は末っ子の男の子でひとしお一入可愛がつっていた弟を集団疎開に出す事は忍びず、私を付き添わせて父方の親戚に世話になる事となり折角希望に燃えて入学した学校とも一学期で別れなければなりませんでした。然し学校でも上級生は動員で、校内に軍需工場がつくられている様な状態でしたから弟に同行する決心をしました。両親も今生の別れになるかも知れないと覚悟をしたのでしよう、わざわざ銀座まで出向き写真館で写真を撮りました。そして私と弟の写真を食卓に置きかげぜん陰膳注9。をしていたようです。又父が疎開先へ何回か来た事が有りました。その頃は静岡でも汽車で五時間位はかかりましたし、切符も簡単には買えない様でしたから、何とか工面をしてでも会いに来てくれたのでしよう。私も親戚とはいえ余り往き来の無かった家で初めて親元を離れたのですから、心細い毎日でした。ラジオから「太郎は父の故郷へ、花子は母の故郷へ・・・」という歌が聴え、皆頑張っているんだと勇気を出しました。

疎開のお陰で東京の空襲にも遭わずに済みましたが、静岡にも警戒警報は度々有りました。敵機は富士山を目標として来、東へ行くか西へ行くか等の噂もありました。一度は本物の空襲があり、町の中央部に爆弾が投下され町役場の方が何人か犠牲になりました。その中に級友のお父上が居られ、級全員深い悲しみに沈みました。何も無い田舎の静かな町中に何故爆撃

などしたのでしよう。

三月九日から十日にかけての東京の空襲では、疎開をしていた六年生が受験の為東京に戻り被害を受けて亡くなった人も数多く居たそうです。私の姉は品川の厚生省に動員で通っていましたが、電車が動かず世田谷から品川まで歩いて行き、途中丸焦げになった死体を避けたり跨いだりして辿り着いたそうです。世田谷の家にも焼夷弾が落ちたようです。軒先を掠めた程度で被害は有りませんでした。が親戚の焼け出された人が父と同居し、母と姉は私達の居る静岡へ来て農家の離れを借りての耐乏生活が始まりました。姉は疎開先でも軍需工場での動員でしたが私は下級生ですから農家の手伝い、みかんの収穫、田植等も少し手伝いましたが三時に出されるおにぎりが楽しみな位で申し訳なかったようでした。この頃出合った事で解せない事が有りました。親戚からみかんを貰って帰る途中、二人の男の人が出て来て戦地の兵隊さんに上げるのだと言って取り上げられたのです。戦時下での権力を利用したのでしょうか。この様な事が各地で行われていたのでしょうか。

そのうち八月十五日の終戦、夏休みの暑い日でしたが登校して居り、校庭で聞いた玉音放送は何が何やらさっぱり分らず家に帰って敗戦を知り、悔しくて悔しくて泣きました。

「出て来いニミツツ^{注91}、マツカーサー^{注92}・・・」が合言葉のようになっていたのですから、又その反面、戦争が終わったのだ、父や弟が戦地へ行かなくても良いのだという安堵感も有りました。いろいろな噂や、家の事情も有り直ぐには帰れず、秋になって漸く世田谷に戻り家族全員での生活になりました。一年二ヶ月余の永い永い疎開生活でした。

戦後の生活も以前にも増しての窮乏生活、発疹チフスの流行、食糧難、それに加え、父の勤務先は軍需関係でしたから失職、新しく始めた事業は自転車操業、結局家を手離し、杉並、練馬と転々と引越し、進学も諦めました。青春らしい青春も無く過してしまつた自分に歯痒さを感じますが、同年代の方達の中にも多くの戦争犠牲者が居られる事を思う時、今の平和

な時代に生きられる幸をしみじみ感じます。

縁あつて我孫子に住み半世紀も過ぎました。三十年程前、市民講座を受け我孫子の地が好きになりました。丁度その頃から僅かですが福祉の關係に携わるようになり、何の取り柄も無い私ですが、少しでも地域の為に役に立つ事が出来ればと考えるようになりました。そして多くの友達や地域の方々とのふれあいが、今の私にとって最高の喜びです。

六十数年も昔に通った学校の校歌に「生きて甲斐あるおみなとならん」、一寸軍國調なのですが私の頭から離れません。其れにしても戦争は絶対にいけません。多くの人間を不幸にするばかり、私達の孫の代又その後も決して有ってはなりません。

最後に戦争の犠牲になられた方々を想い、残り少ない人生ですが、感謝の気持ちで一日一日を過して往くつもりです。

戦争について

佐悠賀 コオ（寿在住）一九一八年生

昭和十六年十二月八日真珠湾の戦闘注93から始った太平洋戦争は日増しに拡大を辿る事となる。私は其の頃竜ヶ崎（茨城県）横町の川地洋品店の縫製工場で女工として働いていた。軍関係のシャツ等を縫っていたと思う。昭和十八年頃である。日増しに戦争が激しくなる。戦争で月の中一日と十五日の休みしか取れず、毎日が必死である。「月月火水木金金」「欲しがりません勝つまでは」其の頃の標語である。

十八年の二月十五日、私共は二人の小学校の恩師である、森田三郎夫婦の仲人で結婚した。

其の頃主人は東京都交通局に籍があったが電気工事人の資格もあったため、徴用となり、シンガポールや台湾等に行き、又日本にもどり横須賀海軍建築部の電気係として勤務していた様である。

私達が結婚した時の新居は、主人の従兄が借りていた家の二階で六畳であった。田舎暮らしをしていた私には襖一重で他人のいる生活は何とも落ち着かず、又鍵のかけられぬ生活は、どうにも気の休まる時がなかった。又使用していた食器類もすべて、セトモノで直ぐ割れるし。水道は、外にある共同のもの。二階の物干しでの食事の支度はとても大変であった。幸いにも一年足らずで近くの四軒長屋の一軒に引っ越すことができ、ほっとしたものである。

日増しに戦争が激しくなり、昭和二十年二月、初めて米国の艦載機かんさいきが東京に入り。其の時初めての子を、日赤産院で出産した。私のいた元広尾から近くであったため一人で行き、空襲警報の最中に一人で女の子を産んだのである。警報の最中で

先生方、誰もいず、私は産室に一人残されたのである。誰もいない時に私は女の子を産んだのである。其の後戻った先生方に押し入られて、切れてしまった所を三針も縫われ、其の痛さは今でも忘れられない。

初めての女の子は弱い子で一度泣いたきり、二週間で死んだ。初めての子で早くから名前だけは考えていたため、麗子と付けた。二月二十日頃と思う、亡くなった日も大雪で、又空襲がありどうする事も出来ず、近所の自転車を借りて、主人の実家（十五里位にあり）にたのみに行った。主人も男泣きに泣いたという。とぼとぼと雪の道を自転車を引きながら、どんなにつらかったと思う。

其れから毎日の様に空襲があり、主人も通勤を止められ、私は一人で近くの有栖川公園の防空壕に毎夜の様に入りに行っていた。風呂等は、各自にはないためめつたに入れず、たまに体をふく位であった。

其の頃政府の方針で強制疎開なる制度があり、私のいた元広尾の近くの下通りから澁谷にかけて軍隊が来て、毎日の様に壊していた。毎日の焚き木にも困る私たちは、夜になると、こっそりと、其れを拾いに行き、其れで御飯を炊いた。

三月十日の空襲は、防空壕に入っていたため知らなかったが、次の日近くの下通りから澁谷にかけ、又東京中で、大変な空襲であった事を知った。其の時恵比寿駅も米をのせた貨車が焼けてお米が貰えるとの事で、バケツを下げ、火がくすぶっている下通りを通って、恵比寿駅まで行った。

あの三月十日の空襲で主人の深川の従兄は、奥さんと子供二人、又澁谷の従姉は姉さんと子供三人が亡くなった。

私は子供に死なれ、身軽になったが、主人も通勤出来ず一人身のため町内の仕事に駆り出され、くたくたであった。其のため主人の実家に疎開する事となり、六月十四日に田舎に行ったが、其の午後から私の居候として、筆舌につくせぬ、悲哀を味わう事となる。

田舎での生活は戦争には関係ないので別として、八月十五日終戦二十年の暮には又東京へ帰り、又元の交通局にもどる事が出来た。又、元の従兄の二階である。今度は三畳の間借りである。次の六畳は米兵を相手にする女性がいたため、毎日毎日生きた心地がしなかった。

其処で長男が産まれた。親子三人でくらしした半年位、其のあまりのみじめな生活に友人が心配し、六畳と三畳の家をつつてくれるという人にたのみ借りる事になったが、其の借りるためのお金が礼金をつくるため、私は長男を背に毎日毎日物売り歩いた。主人の軍から貰ったもの、私の嫁入りに持っていったものは、ほとんど売りつくした。又、主人の田舎の友人が（うどん造り）をしていたため、少し安く分けて貰って、其れを私が売るのである。物のない時で、よく売れた。ある工場では、門にいる男の人が「今主人がいないので早く入って売る様に」と手招きしてくれて、私を入れてくれ、工場の人達がみんな買って来て、其れでほとんどなくなったものである。あの人もう一度会いたいというテレビの番組があったが、私も何とかあの人に会いたいと思ったが、年が上だと思うので、今はもういないと思う。想い出す度に泣けてくる。本当にやさしい人だった。私は一度お弁当のおかずにはサケの切身を持っていった事があり、サケの切身を見るたびに思い出す。

戦争中、東京にすんで一番困った事はトイレの始末である。昔は全部汲み取りで、町内で定期的に汲み取り人が来てくれ、又、人数により町会費を払ったものである。空襲ともなれば誰も来ない。致し方なく各自が自分でバケツで汲み、夜になると近くの暗渠あんきょ注⁴に捨てに行つた。私のいた所は日赤産院下に大きな暗渠があり、いつも汲み取りの人が其処へ運ぶのを見ているため夜遅く捨てに行つた。其処は私の所より八百メートル位あり、とても大変であった。

終戦後又元の三畳にもどり、親子三人、其のトナリには、米国兵を相手にする女の人が出て、入れかわり立ちかわり米兵が来て、あの時の生活はとても筆舌にはつくせぬ程のものであった。子供を背負つての便所の汲み取り、主人と二人で一週

間に一度は日赤下の暗渠迄運ぶのである。下の主人の従兄は一度もしなかった。

又其の中に情ある人の世話で家を借りる事が出来たが、其のお金の事で毎日毎日物を売り歩いた苦勞も忘れられず、足りなかったお金は其の友人から借りて何とかする事が出来た様に思う。

其の後平屋だったものを二階にし、昭和六十年、其の土地五軒が借地だったため買主が表れ、商値で買ってくれて我孫子に八十二坪の土地と家をつくる事が出来た。結婚したときより家、家で苦勞した私は今は別に古い家を壊して新しい家をつくり、下の娘と上下別々にすみ幸せである。

人生終わりよければ全て良し。

もうすぐ九十歳になる私、最後まで自分の事は自分でやれる様に心がけたいと思っている。

重田 幸子（我孫子在住）一九三八年生

夫の転勤で思いがけず大阪に住むことになったのは、昭和五十七年（一九八二）でした。初めての土地で引越し荷物をほどこしながら聞いていたラジオが、大阪府立婦人会館の活動と受講生の募集を伝えていました。我孫子で暮らした十年で友人もでき色々な活動に首を突っ込んでいきましたので、新しい土地でもなんとか居心地のいい場所を見つけないかと考えていました。少々勉強を始めていたカウンセリングの講座を受講しようと訪ねた大阪府立婦人会館は、大阪城址公園の近くにあり元国防婦人会館だったことを知りました。戦後、米軍に接収され、その後は婦人会館として大阪の女性の活動の場になっていました。府下全域から集まってきた女性達が六十余のグループをつくり趣味や学習活動をし、地元ではリーダーとして活躍していました。

私も講座受講の傍ら「情報ボランティア」のグループに入りました。第二次世界大戦中の女性達が国防婦人会の名のもとにどのような思いで、どのような活動をしていたかの掘り起こし作業をしていました。図書館の古い新聞の山を一枚・一枚めくって資料を集めていたのです。私の加わった時期は作業は体験者の女性から一対一の聞き取りをし、座談会形式の話し合いの最中でした。毎日のように白い割烹着姿で出征兵士を見送ったこと、国防婦人会が会員ひとりひとりの寄付で会館を建てたこと、短い期間で膨大な組織に変わっていき、夫や息子を喜んで戦地に送り出すシステムがつくられていったことが話の中から感じられました。四十年近く過ぎても、その活動を誇らしいものとして胸にしまっている方も少なくありません

でした。そう思うことが支えになっていたのかも知れません。しかし一方で体が弱く徴兵検査に落ちたり、人を殺しあうことを恐れ、心を病んだ若者の辛い苦しい様子も聞きました。また、夫や働き手を戦地に送り出して、残された家族をなんとか守らねばと必死であった女性達の悲鳴も聞きました。無言の帰国を迎えた悲しみに耐え生きてきた話も一つや二つではありません。二度と戦争があつてはならないという思いは、お会いした百人近い方々すべての願いでした。

この活動は、終戦直後高等学校の教師になられて歴史を教え退職された先生の下で、「戦争を生きた女たち」の題名で本になりミネルバ書店から出版されました。

私自身は国民学校二年生の夏、終戦を迎えました。電気計測器の製作が仕事だった父は戦中、召集は受けず勤め先は軍需工場となり軍機や軍艦の計測器を作り続けていました。工場は敵機にマークされ何度も艦砲射撃^{注5}をうけました。避難令がでて防空壕に入り部下の一人が居ないのに気付き、外に出て探す間に防空壕が艦砲射撃を受けるといふ経験をしたそうです。自分は難を逃れたわけですが、逆にそのことはとても辛い思い出として残ったようです。九十三歳で亡くなった父が生前たった一度しか口にしなかったことを考えても、本当に心を痛めていたのだと思います。

国民学校に入学する為に、母と私たち兄妹は昭和十九年の春、母の生家山形県米沢市に疎開しました。今年話題になった上杉家の城下町です。幸い空襲もありませんでしたが、二十年夏からはもつと在(田舎)の学校に学童疎開することになっていました。

ボール紙に布を貼ったランドセルの他に肩に掛けた「救急袋」は母の手作りで朱墨で大きく赤十字が印され、中に住所・氏名・血液型を書いた紙と三角巾、手拭、油紙と共に小さな茶筒がはいっていました。非常食として炒った大豆と炒り米がいっぱい詰め込まれていました。親に内緒で食べたのは子どもにとって一寸した冒険でした。

終戦後半年して父と暮らせるようになった家は、会社の社宅で艦砲射撃で歯の抜けたような家並みでした。住んでいた方々はどうされたのでしょうか。小学校三年（戦後呼び名が戻りました）の私にとっては唯気味の悪い所でした。食料品も、衣料品も全て配給で切符を持って行列して買う日々が続きました。親は会社所有の空き地を耕し、野菜は勿論麦や陸稻^{おかほ}注9、6まで植えて収穫し子ども達の空腹を満たしてくれました。小学校の修学旅行はお米（自分の分）持参でした。母親の着物や帯、カーテンまでも私達の服に縫いなおされ、祖父の大きなカーディガンは色系が配色され三人分の可愛いセーターに変身しました。手づくりが当たり前の生活でした。買いたくても、お金があっても物のない時代でした。

それから六十五年、私達は幸いにも戦争のない日々を過ごしてきました。家族を戦地に見送る辛さも、食べ物の無いひもじさも感じることも無くやってきました。

この平和な幸せを二度と失うことのないように私達が今やらねばならないことを良く考え、次代の人たちにしっかりと伝えていかなければならないと思います。

東京大空襲

設楽 昭子（緑在住）一九三六年生

或るグループでの雑談の折、戦争の話が出て、Aさんが東京大空襲の夜、近県から見た東京の空が真っ赤に燃えていたのが忘れられないと云った。私はあの日、本所深川に住み、大空襲の夜両親と逃げまわり「九死に一生」を得た、と云うと皆が、大変な体験をしているので書く様にと薦めてくれた。

私はこれ迄其の話を、家族や身内にも話した事がなく、話す機会がなかった訳で、それを書けるのは年齢的に今かも知れないと、決意した。

序章

当時の住所 本所区菊川一丁目

私の年齢 小学一年生 中和小学校入学

家族 父母、兄姉、妹、私 計六人

兄と姉は千葉県君津郡に集団疎開中。低学年は親元で過し、警報が鳴ると急ぎ帰されたので、勉強どころではない。町の家屋は、強制疎開で取り壊され、跡地で遊んだ妹が、伝染病「腸チブス」に罹り、隔離病棟に強制入院させられた。

食糧難で物がなく、あらゆる物が配給制となり、券を持ち、行列に並んだ。等々。

三月十日午前零時、空襲警報が鳴り出し、あちこちに大量の爆弾が投下され、家の周りで炎があがった。防空ズキンと救急袋を持ち、外に逃げる。外は真昼の様に明るく、爆風と、火の粉が渦巻き、人々の荷物や布団に燃え移り、空中に吹き飛ばされてゆく。

大混乱の中、荷物は火がつくので「捨てる」と怒鳴りあい、私は、赤いランドセルを捨てられずにいたが、父に叱られ、渋々捨てた。

逃げる道は三通りあった。一つは川に行く、二つ目は公園の防空壕に入る、三つ目は学校へ逃げる。父の判断で、コンクリート建ての学校へ逃げた事で、私達は生き残れた。正に運命の分岐点だった。

川へ行った人も、公園の防空壕へ入った人も全滅した。窒息死だった。逃げる途中、近所の人に「防空壕が安全」と誘われた事が、今も耳に残っている。父の判断が正解だったのは、若い頃浅草で「関東大震災」で被災した経験があった事が良かったと、後によく話していた。

逃げ込んだ校舎の周りも炎が迫り、父や警防団の人達が、寝ずに消し止め、守ってくれたので大勢の人が救われた。

朝になり、鎮火したので外に出ると、何と辺りは見渡す限り焼野原。燃え残りの炎や白煙がまだたち込めていた。その中で、母が窓枠に置いた荷物の中、弟の「位牌」だけが焼け残り、まるで「奇跡」、守られたと思った。父と焼跡に行き、食糧を探す。焼けた米びつの中から焦げた米や、芋類、鍋釜を拾い集め、食事をした。夕方本郷に住む叔父が探しに来てくれ、深川から文京区本郷迄、焼跡の中歩いて行った。道端には黒焦げになった死体の山が。遺体は焼け残って丸太の様に炭化し、中には煙っている遺体もあった。

母が「見ない様に」と云い、よけて歩き続けた。叔父の家は被災せず、数日世話になるが、他の家族も来たので、疎開中の

兄と姉を呼び、母の故郷秋田県能代町へ、着の身着のまま疎開する。上野駅は、東京脱出する人々で溢れ、大混雑していた。列車が到着すると、人々が殺到して、我先に窓から飛び乗った。私達子供も、窓から押し込まれた。

秋田では、水が合わなかったのか、家族が全身に湿疹ができて、又、二階まで積もる大雪に東京育ちの父が音をあげてしまい、半年で脱出、知人が居た茨城県水海道町に転居した。

秋田では「東京っ児、疎開っ児」と云われて、楽しい思い出はない。私は栄養失調だったのか「脚気」になったりしたが、何よりも悲しかったのは、三才上の姉が疎開中に結核に罹り、たった十三才で亡くなった事はとても辛い思い出だ。二十一年に死亡した。

私達は茨城県に来て初めて、貧しい乍らも人間らしい生活が始められたと思う。

疎開先でいじめにあったり、空襲で学力がおちていたが、次第に明るくなり、元氣一杯の子ども時代を送ることができた。

終結

私の子供時代の思い出は、楽しかった事柄がまるで思い出せない。「入学式」や遠足はどうだったのか、記憶にないのだ。それは、後の戦争体験が、あまりにも強烈だった為だろうか。

あの夜を思い出すと、一瞬にして一年生の私が、あの光景が再現され、色褪せる事なく甦よみがえる。まるで体についてしまった疵の様だ。年月を経ても居ついている。だが、それは痛みを伴わず、むしろ音のない「トーキー映画」の様に、画像が映し出されるだけだ。

普段は知らぬ顔で眠っているが、必要とあれば、即座に「スイッチ・オン」される。戦争体験は私が「生きた証」の一場面と捉え、私の命と共に有り続けることだろう。

私の戦争体験

島藤 絃子（東我孫子在住）一九四一年生

私は日本がパールハーバーへ奇襲をかけた四日後に神戸市で生を受けた。四人姉兄の末っ子、それも母は当時では少し高齢出産に近い年齢だったようだ。

上姉は女学校在学、兄も旧制中学、次の姉は小学校へ通っていた。戦争は大本営発表とは違って敗戦に向けて深みにはまっていた。関西、中国地方は、京都以外は敵機の攻撃の的になっていた。父は小柄であり技術者であったことから兵隊にはとられず、川崎の軍の関係の建設にかかわり我が家は女世帯であった。昭和二十年、女学校卒業後師範養成所をでて、教鞭^{注97}をとり出した姉を神戸に残し、私たちは父のふるさと三重県の伊賀上野に疎開していた。神戸での旧制中学校から伊賀上野の中学校に転校した兄は、津の軍需工場に出勤させられていた。私は四歳になっていたのだが空襲警報がいつなるかの毎日、母は外出のときは常に私を背中に背負っていた。三重県でも津や尾鷲とちがい山の中にある伊賀上野は戦争であることは、夜の電灯を暗い布で覆う^{おお}くらいしか影響はなかった。もちろん食料は配給制ではあったようだが。

この年の三月に東京大空襲があったが、まだ関西の庶民は警戒しながらも日常の生活をしていた。五月、母は神戸に残した長女の夏用の衣料品を届けるため私を背負って近鉄に乗り大阪へ向かった。大阪の十三駅に電車は着いたとき空襲警報が鳴った。乗客は全員電車から降り、駅の通路へ避難し始めた。四歳の私の目に、そのときの空の様子があつきりと焼きついている。その日は五月晴れの青空であったのに、空から焼夷弾が異様な色で降ってきた、キラキラと幼い私の目にはきれいな

だとさえ思われた銀色であった。しかしそれが爆弾であることは幼子にもすぐわかる現象がそこに現れた。担架に載せられた血だらけの怪我人が、次々避難する私たち電車の乗客の脇を過ぎていく。避難していく母と私に、同乗していた軍服を着た男性が付き添ってくれた。そしてそばにはもう一人おさげの小学生と見える女の子が一緒だった。

避難場所へついたとき、あんなにきれいな青空だったのに土砂降りの雨に変わっていた。

空襲が解除されるまで、電車の乗客はみな互いに助け合いながら時間を待った。母のそばにいた女の子は大きな荷物を背負っていた。母は女の子に一人旅かと聞いていたようだ。(もつともこの話は私が少し大きくなってから話してくれた記憶なのだ。)女の子の母親は京都へ仕事に行っていて、女の子は母親に夏がけ布団を届けるために電車に乗ったそうだった。

五年生だといったその子がそこで行った行為を、母は私が大きくなって何かにつけて話して感心していた。女の子は背負っていた布団の縫い目から少量の綿を引っ張り出して小さく丸め「おばちゃん、背中の赤ちゃんの耳にこの綿つめてあげて、きつと爆弾の音をこわがっていると思うから」と差し出した。母は感激して、神戸の姉に届けるつもりのお菓子を出してその子に、「京都まで無事に着くように、途中でおなかがすいたら食べなさい」と渡したそうだった。私は成長していく過程で、少しでも甘ったれたことを言うと母からあのとときの女の子はしっかり者だった、無事京都へついたらどうかと、いつもこの話を聞かされた。

空襲が解除され、動き出した電車で神戸に向かい、姉が下宿している親戚についたとき命拾いをしたと母はようやく生きていたことに感謝したそうだった。

このあと伊賀上野へ戻った私たちだが、数日後に神戸大空襲があり、姉は命からがら伊賀上野へ帰ってきた。そして私たちの神戸の家も焼け落ちてしまった。

この夏、広島・長崎に原爆が落とされ、戦争は終わった。軍需工場から戻った兄は、しらみだらけの服やゲートル^{注98}を家の裏の中庭に全部脱いで、それらを日光でさらしていたのを記憶している。

その年の秋、母に背負われる必要のなくなった私が、一人で歩くことができると母は大喜びしていたと、残りの学生生活を始めた兄が笑って教えてくれた。四歳まで背負われていた私がなかなか歩かないのではないかと母は案じていたらしい。

父は借家だったが気に入っていた大きな神戸の家を焼かれてしまったので、そのまま東京に残り仕事を続け、昭和二十四年一家は関東へ越してきた。私は我孫子で小学生生活を、長女は我孫子で教師を、兄は大学生生活を、次女は中学生生活を始めた。

そして、四十代半ば過ぎまで関西弁ですごした母は、我孫子弁になじめず言葉の壁の中で小学生の私に通訳のような役割をさせながら友人もあまりできずに神戸に戻りたいといいつつ老後を送り、生涯を終わった。情報は音の悪いラジオだけのころの話である。今の我孫子市の人口比率だったら、母は閉じこもらずに神戸時代と同じように多くの友人を作り地域活動をしていただろうと残念でならない。

そして戦争がなければ、私たち一家はこの我孫子という地を知らずに終わっていたであろう。